

木の涙の歴史 アマゾンの天然ゴム

著者	小坂 允雄
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	3
号	3
ページ	22-23
発行年	1986-09-20
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00006720

天然ゴムを産出する植物は世界で400種ほどあるとされ、それらは赤道を中心に南北緯度30度内の地帯に成育している。しかし、現在世界の生産の大部分を占める東南アジアの天然ゴムは、通称パラ・ゴム樹（学名ヘベア・ブラジリエンス *Hévea Brasiliensis*）から産出されるもので、この樹は、その名が示すとおり、ブラジルのアマゾン河上流地域が原産地なのである。

この地域に住むインディオたちはヨーロッパ人が来るはるか以前からゴムの存在を知り、それを利用していた。コロンブスが新大陸に到達した時に、インディオの子供が小さいゴムのかたまりを持って遊んでいたといわれている。彼らは、長い間の経験によってゴムの利用法を知り、ゴム製の水を入れる容器を作り出していた。その方法は、始めに粘土で型をこしらえ、日光で乾しかためたうえで、幹からとったゴム液をその表面に塗り、それを煙でかわかすというやり方を何度もくり返してゴムの厚みをつけ、最後に水中で粘土をとかしてゴムの容器を取り出すというものであった。彼らは、ゴムの樹液を「木の涙」と呼んでいた。

このようなゴムの存在と効用は、1745年、地球の経緯度を測定するためにフランス学士院からエクアドルなどに派遣されていたラ・コンドミーヌによってヨーロッパに紹介され、世の関心を集めるようになった。1770年に、英国の化学者J・プリーストリーは、ゴムが鉛筆の字を消すことを発見し、消しゴムを作ってこれをインディアン・ラバーと名づけた。これが、ゴムがラバーと呼ばれる語源である。1820年ころまでゴムはこの消しゴム用に主として用いられていたが、その後加工技

木の涙の歴史

アマゾンの天然ゴム

小坂允雄

術が徐々に発達し、防水布などに利用されるようになり、1900年ごろから、自動車産業の発展によって、その需要は爆発的に増大したのである。

原産地であるアマゾン河上流はゴム景気に沸き立った。これはカリフォルニアのゴールド・ラッシュにも似ていた。人々は大密林の中のゴムの木を求めて殺到した。農園主たちは広大な土地を次々に買占め、ゴム採取に必要な労働力として、早ばつに苦しむ東北部の農民やインディオを大量に集めた。セリングイロ (Seringueiro) と呼ばれたこれら労働者たちは、農園主や仲買人から豆や乾し肉などの食料を前借りし、厳重な監視の下で採取労働に従事した。彼らは100本ほどのゴムの木を割当てられ、幹への切り込みと樹液 (ラテックス) 収集を行なうため、日に2回密林の中を歩きまわらねばならなかった。集められたラテックスは、煙で燻してかためられ、アマゾン河口のベレンから輸出されていた。

河口から約1400キロ上流のマナウスの町は、ゴム王国の中心地として繁栄を謳歌していた。世界各地から資材を集めて建築された壮大なアマゾナス劇場 (Teatro Amazonas) は、ヨーロッパからの劇や音楽で毎夜賑わった。その玄関は、集まってくる馬車の車輪の音を消す

官であつた英国人 E・ウィッカムはゴムの木に目をつけ、その種子をロンドンのキュー植物園に送り込んでいた。同園で発芽させ、育てられた苗木は、セイロン（現在のスリランカ）、マラヤ（マレーシア）、シンガポールの各地に送られたが、シンガポールの農園に植えられた22本の苗木のみが生き残り、この22本が東南アジアのゴム樹の親木となった。このような情勢を背景に、1895年、英国人キンダースレーが、マラヤで初めてゴム園を開いた。これがパラ・ゴムの商業的栽培の世界で最初のもつとされている。以後大規模なプランテーションによる栽培ゴムの生産は、東南アジア各地に急速に広がっていった。

天然のゴム樹からの原始的な採取に依存するアマゾンの生産は、質量ともに東南アジアに対抗できなくなった。1910年に世界生産の約1割を占めるに過ぎなかつた東南アジアの栽培ゴムは、1913年にはアマゾンの生産を追いこし、1923年には世界生産の90パーセントをこえるに至つた。アマゾンの「木の涙」は、遠く地球を半周した地から、再び世界を制覇した。

1920年代に、米国フォードは、自社のゴム需要を賄うため世界のゴム生産を支配していたイギリス資本に対抗して、アマゾンでのゴム・プランテーション経営に乗り出した。しかし苛酷な自然の前にこの計画は失敗に帰した。アマゾンは再びゴムの繁栄を許さなかつた。

現在、ブラジルの天然ゴム生産は、世界生産の1%にも達しない。

（初出：『すてきな旅・ラテンアメリカ』世界文化社）

ために、ゴムをまぜた煉瓦が敷きつめられている。ゴム成金たちは、下着をポルトガルへ送って洗濯させ、服装をパリへ注文して取り寄せたといわれる。その子弟たちもまたパリへ遊学し、派手な生活を送っていた。

しかし、アマゾンの大密林が突如演出したこのようなゴム・ブームは、1910年代に入って急激に収縮した。アマゾンのゴム王国はわずか30年ほどの期間をもって崩壊したのである。

すでに1876年に、ホンジュラスの森林管理